

いた私は、懇親会およびおみやげ用に、「越の寒梅」を手に入れるように先生から言われ、学校の出入りの者をお願いして入手した。

尾崎先生と一緒に、福島潟のオニバスの保護事業に関わったこともある。福島潟では、干拓の影響でオニバスが消滅したと思われていたが、石沢先生と私の調査で、オニバスがまだ生き残っていることを確認することができた。そこで豊栄市は、オニバスの保護事業に取り組むことになった。尾崎先生の助言の元、豊栄市の職員の方が試行錯誤を繰り返し、ある程度の保護、増殖の成果が得られた。小学校にオニバス栽培用のプールを作ったり、オニバスが生えている池のアメリカザリガニを退治した。私はほとんど何もできずにいた。豊栄市はオニバスとヒシクイを市のシンボルとした。その豊栄市も、今年の春から新潟市と合併した。

当時、初任校として私が勤めていた新潟向陽高校には、もう亡くなられた荒井先生という化学の先生がおられた。荒井先生は大変精力的な方で、化学はもとより、生徒指導、学年主任でらつ腕をふるう一方、鳥屋野潟や新潟水俣病などの公害、環境問題にも関わっておられた。私はその先生の紹介で、河辺先生が主催する「環境問題懇話会」に顔を出すようになった。月に1回、夜、新潟水俣病の弁護団長、坂東先生の西堀にある事務所で、講師にあたられた方が環境問題に関する話題を発表、提供し、それについて十名位の参加者が討論するという会である。話題は多岐にわたった。そこでも尾崎先生に会ったのは、驚きであった。先生はしばしば海外旅行をされていて、その時の写真を話題として提供されたこともあった。諸橋さんもその会の常連であった。また、鳥屋野潟の環境問題に関して、尾崎先生が荒井先生を訪ねて、新潟向陽高校に来られたこともあった。

尾崎先生にお会いしたのは、先生が高校を退職されてからなので、先生が本当に精力的に活躍されていた時期のことは、残念ながら分からない。尾崎先生をご存じの何人かの先生からは、若い頃とほとんど変わらない、ということは何回か聞いた。私が持っている尾崎先生の思い出は、断片的なものにならざるを得ない。じねんじょ会にご一緒したとき、夜空の下、火の回りで、皆に促されて、やおらハーモニカを取り出して吹き始めたり、それほど大きくない声で歌ったり。じねんじょの「勉強会」で酒を飲み過ぎて気分が悪くなった私に、夜空の下で優しく声を掛けて下さったこともあった。秋山郷でのじねんじょ強化合宿の時、河岸段丘の急なつづら折りの坂道を登り、汗だくになってメグスリノキの大木を見に行ったこと。ある夏、私が担当者として佐渡でじねんじょ会を行ったとき、金剛山という山を下りたところで、先生が登山道でしばらく倒れ込んでしまったこと。鳥屋野潟の調査の資料整理で先生の自宅に何

回かおじゃましたこともあった。部屋はおしゃれに整理され、植物の資料のみならず、海外旅行での写真や、クラシック音楽のCDなどもあり、高い文化の香りを感じた。クラシックのコンサート会場で、何回か先生夫妻をお見かけたこともある。

私も転勤を重ね、次第に尾崎先生とお会いする機会も減り、たまにお会いすると、失礼ながら、ずいぶんとお年を召したように感じた。去年の春、たまたま久しぶり電子メールを見て、尾崎先生の訃報を知り、お葬式に駆けつけた。もう少しで知らないでいるところだった。お葬式の最後に、奥さんがしっかりとした声で、みなさんは早く逝かないでください、長生きしてください、とおっしゃったのが、大変印象深く残っている。また、亡くなられた後、新津の植物資料室に運び込まれた先生の蔵書を記録させていただいた。ずいぶん古い本もあり、東京、新潟などの古本屋で求められたものも多いのだろう。戦前、戦中、戦後のもの、その紙質、細かい丁寧な字の書き込みを見るにつけ、若い頃の尾崎先生、あるいはその時代の人々の勉強ぶりを想像し、恥ずかしいばかりである。

尾崎先生のことども

佐藤 信 弥

尾崎先生との初めての出会いは確かではない。多分、柏崎は番神岬の海岸の観察会からだろうと思う。このとき私はまだ頸城牧に住んでいて牧から参加したか、自宅から参加したか確かではない。この観察会は海浜植物の観察会であった。初めて参加した私にはどの人が尾崎先生だったのかの記憶が鮮明でない。この観察会で、平田幸治先生（植物病理）から「お前は新米だから採集した植物には胴乱に入れる前に荷札に名前を書いてつけなさい」と指導されたことは私の石頭から消えていない。

尾崎先生はカエデの大家でおられた。私はコミネカエデ、ミネカエデ、ハウチワカエデ、イタヤカエデ、ウラジロイタヤ、イロハカエデ、カラコギカエデ、メグスリノキなどの生態や分類分布についてのお話をおききした。もちろん調査現場や山小屋やテントの中で蕨蓄のあるお話をおききしたが、それは飯豊山での調査を置いては外にない。赤谷コースでのことであった。この頃はまだ若くて体力も気力も私にはあった。その年の飯豊山の調査は赤谷コースと分かった時、私はひとりで予備調査をしたのである。二王子温泉に一泊して裏の岩場の急な斜面を登攀してハクサンコサクラが出てくる手前あたりまで踏査した。本番で我々はこの辺りに幕営をした。このコースは体力的にもきついと自分の予備調査で想定していた。真夏日の続く暑い日であった。一番遅くここに到着されたのが尾崎先生だっ

たと記憶している。かなりばてておられた様子であった。先生は標本の採集をされ記録を綿密に取られたが、尾崎先生の寝袋と雨具が先生の足を遅くしたのだと私は思っている。この雨具も寝袋も日本製ではなく進駐軍の中古であった。どうしてこの装備を手に入れたかは知らない。先生はずいぶんこの装備を自慢しておられた。なるほど、この寝袋には羽毛が入っていた。縫い目が破れて羽毛が出ていたと記憶している。雨具は大きすぎてこれを尾崎先生が着られると黄金バットの様であった。

調査の七つ道具のほかにハーモニカを携行されて懐かしのメロディを聞かせて下さった。この夜の曲目までは記憶にないのが残念である。

赤谷コースの調査隊は十名以上だったと記憶している。予定の調査を終了して全員元気で下山して石沢先生の出迎えを受けた。今は昔の思い出である。

飯豊山の外に、尾崎先生は環境庁の植生調査を瀬波海岸、桃崎浜、村上市のお城山を担当され、私も尾崎先生のお手伝いをさせていただいた思い出があります。

「むかご」などを基に年号を入れた文章を作るのが正しいのですが、その時間の余裕がないので私の記憶だけで書いたことをお許し下さい。

杵 差 岳

関 省 吾

尾崎先生と初めてお会いしたのがいつであったか、どうしても思い出せない。おそらくじねんじょ会が発足した、昭和39年(1964)ころであったはずである。いつの間にかごく自然にあちこちの山へご一緒するようになり、池上先生と共にじねんじょ会の顧問として、長い間、会を見守っていただいた。

先生はあの細い体で飄々と山を歩き、夜の勉強会ではよくハーモニカを吹いて、会を盛り上げてくれた。体を前後左右に振りながら気分を出してハーモニカを吹く姿をつい昨日のこのように思い出すのである。

先生とご一緒した山で、最も思い出深いのは杵差岳である。池上先生と尾崎先生が昔、杵差岳に登ったところ、山頂の小屋が倒壊していて、やむなく隙間にもぐって一夜を明かした話とか、西俣川で池上先生が川に流された話とかよく聞かされていた。

じねんじょ会で杵差岳に初めて出かけたのは、昭和44年(1969)である。2回の予備調査を経て、尾崎先生がリーダーとなって、19名という大部隊で8月4日から本調査に入った。東俣川から登り、西俣川に下るといふ計画であった。8月4日、カモスの泊場で幕営し、8月5日、杵差岳を目指して登山を開始した。ところが、カモス峰の急登で雨

が降り出し、次第に暴風雨となっていった。

カモス峰を越え、千本峰のあたりで進めなくなり、激しい雨の中でどうするか相談した。

細かいことは忘れたが、杵差岳に何回も登っている尾崎先生は、危険な場所はないのでいくら遅くなくても小屋まで行こうといわれた。私は、荷がかなり重く、上に行けばさらに風雨が強くなるから、このあたりで泊った方がよいと主張した。結果として、千本峰の海拔1,160m付近で、やぶの中にもぐって一夜を明かすことになった。非常食を食べ、かなりの急斜面にテントにくるまって、ずり落ちないようにふんばっての一夜は長く、まさに地獄であった。次の朝、小雨の中で朝食もそこそこに出発した。間もなくまた激しい雨となり、植物どころではなく、ほうようにして前杵差岳の登りを過ぎ、命からがら杵差小屋にたどり着いたのであった。小屋は荒天のため、超満員で身動きもできぬ有様であった。

8月7日は暴風雨の中、鉾立峰まで行ったが、すぐに小屋に逃げもどった。8月8日、雨の中を大熊小屋まで下り、8月9日、大石に下山した。8月5日から8日まで、まさに集中豪雨の中心地にいたようで、じねんじょの夏合宿では最も悲惨な山行であった。

千本峰のビバークが正しかったのかどうか、尾崎先生と話す機会はついになかったが、どちらにしてもかなり危険な状況にあったことは確かである。幸い、あまり離れず、全員がまとまっていたのが良かったのであろう。

ビバーク地点で、カボチャなどの投棄事件があったことは後で知った。また雲母温泉音頭が作られたのもこの夜であったと思われる。

この合宿の成果は、じねんじょNo.6(1971)に尾崎先生の編集でくわしく報告されている。

2回目の杵差岳調査は平成11年(1999)の夏合宿として計画された。8月4日、関川村の道の駅(桂ノ関)に集合し、東俣彫刻公園に移動し、幕営した。尾崎先生と高橋(庄)さんは先行して、カモスの泊場まで行くとのことで、元気に出発していった。(この日、小千谷では39.5℃を記録した)

8月5日、杵差岳を目指して6時半ころ、林道終点を出発した。ものすごい暑さで休んでは水ばかり飲んでいる。10時半にカモス峰、途中、昼食をはさんで午後2時すぎ、ようやく千本峰に着く。前回のビバーク地点と思われるあたりをよく眺めたが、よくもこんな所で一夜を耐えたものと感心した。

2ℓの水を飲み干して、完全にバテて一行からは大きく遅れてしまい、前杵差岳の長い登りを休みながらよろよろと歩いていた。

この時、前方に人影があり、なんとか頑張って追いついたら、先行した尾崎先生であった。